

子どもの成長を支える地域をつくる

～「ひだまり子ども食堂」の実践～

今村 井子

・はじめに

息子が小学生の頃、いじめをきっかけに学校に行けなくなった時期があった。「明日からぼくは学校に行かない」と息子が言い出すまで、私は息子が、学校に行きたくないと言出した原因について全く知らなかったし、気付かなかった。そういえば、「最近、なんだかよく寝られないみたいだけど、疲れているのかな」くらいに思うことはあったが、思春期前にはよくあること、くらいにしか捉えていなかった。実際、一定期間学校に行けなくなって改めて思ったのは「学校に行けなくなる」ことの当事者のたいへんさだった。何となく意識せずにはいられない「後ろめたさ」「弱さ」「親の責任」。自分自身、教師をしていた経験を持ち、不登校の生徒を受け入れる側の学校現場にいた者としても、大いにとまどった。「まさか、わが子が」というのが正直な気持ちだった。そんなとまどいの中、親子で「不登校」を経験し、人ひとりが成長するということがどういう事なのか、子どもが大人になるためには何が必要なのか、身に迫る思いで問い直させられた。そして、実際息子が学校に復帰するまで、何が息子の弱っている心を立ち直らせてくれたのかについて考えると、その経験が息子の成長についてかけがえのないものであると実感した。息子の成長を促してくれたこと、それは息子だけでない、すべての子どもたちの成長につながるものではないかと思い、以下、子どもの成長にとって必要不可欠なことに関する私なりの考察と、それを促すために「ひだまり子ども食堂」を立ち上げるまでの実践について述べていきたい。

1, 息子を通して見えてきた、子どもたちの今

日本の子どもたちの自己肯定感が先進国中でも突出して低いと言うことが指摘されてから久しい。内閣府「平成26年版 子ども・若者白書」においても「自分自身に満足している」についての割合が日本は45.8%に対し、フランスをはじめイギリス、ドイツ諸外国は80%を超えている。それは、別の質問「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」割合でも日本52.2%、フランス86.1%となっているのをみても、連動している結果であり、改めて自己肯定感と意欲は相関関係があるといっても良いのではない

だろうか。(注1)この統計から、自己肯定感や意欲の低い若者が、諸外国に比べて日本は顕著に多いということは、日本の未来にとって深刻な問題である。

しかし、いったいそれは子どもたちの生活のどこから生み出されているのだろうか。また、違う視点で見るなら、日々の生活の中で様々な課題にぶつかった時、その問題解決がうまくいっていないことで自信をなくし、自己肯定感が低くなっているということではないだろうか。

私は自分の息子が実際、学校に行けなくなった時、まさに息子は「自分はだめな人間じゃないのか」「みんなと同じではない、普通ではない自分はだめな存在なのか？」と悩みを抱えていた。そして、学校で起きたいじめをきっかけに、自分のプライドを保てなくなり、自己嫌悪に陥り、心を閉ざしてしまっていた。まして、そのことは一番に自分を大事に思っている親を傷つけることになる必死で隠していた。隠すことでしか自分を平静に保てなくなっていたようだった。そういったときに何が彼にとって必要なのだろうか。

時を同じくしてこの4年間、私は、厚生労働省が進めているファミリーサポートセンター事業の子育て支援業務をNPO法人で担うようになり、多くの母親たちや子どもたちの悩み相談を受けるようになった。ママ友のラインいじめや学校のいじめ問題、不登校や学校とのトラブル、経済的困窮の悩みなど、大人も子どもも生きづらさを抱える現実にはぶつかることが多々あった。

一昔前であれば、困ったことができた時、身近に相談できるおばちゃんやおじちゃんがいいて、なんとか地域で解決をしようとする動きがあった。結果的にそれが機能しセーフティーネットになっていたことがたくさんあったのだと思う。地元のある男性がNPOを訪れ、私にこんな話をして行かれたことがあった。「子どもの貧困が取りざたされているけれど、自分の時代にも生活に困っている子どもがいた。でも、日常的に近所の人が「ご飯食べていきな～」と声をかけてあげていた。あの頃は、そういうつながりのある地域があったけど、今はないからなあ。」と。

また、子どもたちが自由に、子どもたちがつながる場所になっていた空き地もここ十数年で激減している事も、子どもが孤立化しやすい要因かもしれない。人口減少で、管理の行き届かない空き地は増えていても、ドラえもんの漫画に出てくるような、土管があったり、古タイヤがあったり、子どもが自然に集うような空き地は、「防犯上の問題」や「事故があった時の責任問題」で見なくなった。子どもが気軽にボール投げをしたり、かけっこができるような空き地はなくなり、代わりになる公園では「キャッチボール禁止」「ス

「ゲートボード禁止」の立て看板がたつ。社団法人日本公園緑地協会の調査によると、公園における「キャッチボール、ボール遊びについて」指定都市、中核市、東京都特別区のうち人口 30 万人以上の都市では半数以上が「キャッチボール、ボール遊びを規制の対象にしているとのことである。(注 2)

子どもがやりたいことが自由にやれる、遊びを思いっきり楽しめる場所も減ってきていることは、今の子どもは塾やスポーツチームなど別団体に属さない限り、親や先生以外で出会う大人は皆無といった状況も生まれているということである。屋内でゲームばかりで外遊びをしないといわれがちな今の子どもたちにとって、実は子ども自身が遊びたくても遊べない環境になっているといえないか再考すべきであろうと思う。それが、子どもの成長にどう影響してきているのか、注視すべきではないだろうか。

2 , 子どもたちの成長の土台を作るために必要なこととは何か

1 で触れた不登校になった息子を元気にさせてくれたことは何だったのだろうか。また、ファミリーサポートセンターで受ける子育て相談はどうしたら問題解決に向かうのだろうか？それは、息子と同様、日々のことを日々の中で乗り越えるための空間・場所・人が機能的に出会う仕掛け作りが求められているということではないだろうか。今回、息子が立ち直った状況と同じような、肯定感を押し上げる場・人・空間を作る必要があると思った。それは、息子に限らず子どもたちすべてにいえないだろうか。子育て相談で私が受けた内容を解決に向けるためには、それぞれの地域で日々の中で乗り越えられる空間・場所・人が必要ということではないか。

息子の弱った心を元気づけてくれたものは、親でない第三者が「価値観や考え方は一つではない」と教えてくれ、息子のいいところを見つけ評価し、自分に自信を持つように諭してくれたことだった。もちろん、親の役割もある。私も夫も息子と向き合う時間をつくり、とことん話し合った。息子が大事な存在だと一生懸命伝えようと努力した。でも、それだけではきっと不十分であったろう。親だけで頑張り続けることはできないし、それだけでは自分たちだけの問題に終始し、自分たちだけで何とかしようとするあまり空回りし孤立してしまっただろうと思う。そう考えると、私たちも親として周りの大人に支えられ、親ができることは何か、気付く機会を周りのおとなから与えてもらった。「親でない大人」の存在は、親とは違う価値観や多様な人生を、私たち親子に教えてくれた。子どもを育てるためには、性別や年齢、性格、学歴、価値観など多様性を受け入れた場所や空間、そこ

に集う人が必要不可欠なのではないだろうか。

3、「ひだまり子ども食堂」の挑戦 ～子どもも大人も、自然に、本音で、自由にいられる場所が子どもを育てる～

子どもや大人が集うことで自然に成長を促す場所を意識的に作れないか、または相談に乗っていた子育て世代の経済的なたいへんさを何とか支える仕組みが地域で出来ないかと考えはじめた。ちょうどその頃、東京からスタートした「子ども食堂」の取り組みを知った。「食べること」は楽しさやあたたかさを自然に生み出し、みんなでおいしく食べるというだけでわくわくするような昔の食堂をイメージできた。そこで、NPOのカフェで子ども食堂ができないかと東京にリサーチに行き、学ぶ機会を得た。そこでは、いろいろな形で子ども食堂を立ち上げることが可能なこと、その地域に見合った作り方で実現可能なことを学んだ。私なりにそれを実現できないかと、食でつながるダイバーシティのような子ども食堂を作りたいと思い立った。月一回でも子どもたちを食で元気にする場を作るとをまずやってみよう、そこにはきっといろんなつながりが生まれ、新たな時間を共有することで、子どもたちを下支えするような、子どもたちの自信ややる気が自然に生み出されるような場所が出来るのではないかと思った。

「平成 28 年 群馬県子どもの生活実態調査報告書」によると、小中校生の自己肯定感と体験の数に相関関係があるとの調査結果が出ている。また、ひとり親家庭の「悩みや相談事の相談相手」の調査では、父子家庭の一割超が「どこにも相談したくない」または「どこに相談したらいいかわからない」と回答している。ひとり親家庭にかかわらず、困難に直面したときのネットワークは子どもの育ちに直結しているといえ、問題が深刻化する前のセーフティネットに子ども食堂はなるだろう。身近な場所に子ども食堂があれば、子どもを通じ大人もヘルプが出しやすい環境が整えられ、子ども自身も家庭以外の場所を頼ることを選択肢として知ることができるだろう。

実際、「ひだまり子ども食堂」をはじめたところ、思いもよらない広がりが生まれ、たくさんの方がひだまり子ども食堂の運営に関わって下さるようになった。コンセプトは「子どもたちをひとりぼっちにしない活動」としてスタートしたが、様々な立場で様々な思いをもった多くの大人たちが応援してくれることになった。子どもたちにお腹いっぱい食べてもらって元気になって欲しい、子どもたちに元気になってもらって自分の夢や未来を描いてほしいなど、「子どもたちの成長をみんなで育みたい。」という思いがあふれる場所

になった。そして、いつも孤食という高齢者の方もいらして下さるようになり、子どもたちと世間話をしたり人生について語って下さったり、子どもたちを叱ったりほめて下さったりしてくれている。そういう大人の本音ややりとりが安心感につながり、子どもも大人も平等である時間と自由な空間が、今の時代にとっても貴重だと私は感じている。

また、ボランティアで参加してくれている高校生の表情を見た引率の先生が、「学校ではみせない、いい顔をしてるなあ」とのお話をいただいた。学校とは違う場所であるこの場所の意義を物語っている気がしている。

この「ひだまり子ども食堂」がスタートし、一年が過ぎた。参加者の方から寄せられた感想をいくつか紹介したい。「子ども食堂」が子どもの成長にとって大切な場所になっていることを表している言葉の数々ではないかと思っている。このような場所が多くの子どもたちにとって必要で求められている場所になっていることを再確認しながら、もっとこういう場所が増えていくことを願ってやまない。

「いつも優しい気持ちになれて大切な空間です。これからもずっと続けて欲しい」

「去年のスイカわりが楽しかった」「何度も救われました。子ども食堂が続いて広がって多くの人が協力し合えたらと願っています」「思わぬ人との出会いがあり人生の楽しみが広がりました」「とーってっもおいしくてほっぺたがとれそうぐらい おいしいよ」

・参考文献 「子どもが自立できる教育」岡田尊司 小学館

子どもの貧困が日本を滅ぼす 文藝春秋

若者のためのまちづくり 岩波書店

平成 28 年 群馬県子どもの生活実態調査報告書

・引用文献 注 1 平成 26 年子ども若者白書 内閣府

注 2 一般社団法人 日本公園緑地協会

平成 28 年都市公園等の整備・管理運営に関する取り組みに関するアンケート